

『なに～部誌に春合宿のことを書くんやと～
そんなもん覚えとるわけないやないけー』という題』

2年生 今泉 浩幸

「しんじさん素敵!!」そう叫びながら M は
しんじの胸に顔を埋めた。しんじはやさしく
M のかたい髪を掻き上げ... 親に優しくは
びるを舐れて..... 「リンスしてる」とささやいた
M は黙ったままである。月の光に丸石エンペラーの
フレームが冷たく輝いている。ふと妙な声に
後ろを振り返ると、そこでは M が変装した
松尾氏をうしろから舐めているではないか。
この怪奇ともいえる光景を目のあたりにした
純情少年(弱冠未成年)は、ひとり、愛車デパート
フラウシンのユラシアにまたがり暗黒の R42
を夢中で駆け出した。ここは本州最南端の
地 潮岬に近い春の夜の浪打ちざわである。

「うそでっせえ〜」

日々、梅班の春合宿 12日間の行程は
極めて平穏な、極めて質素な毎日であった。そ
の固定化された1日のサイクルは ESCA ニュース
79年版に詳細に報告されているので、ここでは
省略しよう。またエスガウ代に巨額は ツーリ

インポートを参照してもらうことにしてここではその詳細に触れることは避けたい(いずれも筆者作)。なんと春合宿について書くのはこれぞ本目である。唯一のねたで3本もの作品を産み出すことは、我々 T.I.T.C.C. 部員にとって至難の技であることは明白であろう。よて創作意欲をいやおうなく欠かされた筆者は、この原稿の作成を後へ後へと引き伸ばし、到々ここまで追いつめられてしまった。印刷はもうはじまっており、私のホールペン原紙が提出されなければ、次ページ以降のページナンバーが確定できず印刷治勳に支障をきたすというのである。

筆者は 彼もちえの強い責任感においてなんとか書き始めることを心に誓った。だがあくまでも誓っただけである。彼はいつになったら本当に書き始めるのだろうか。
(本文 おわり — 以下 おまけ —)



次ページへ

おわび 1ページ以上をくだらない能書きに費しみな様の貴重な紙費源を浪費したこと、なぐびにサッカーをやっていない三ツ井、吉田までも異常性格者に仕立てたことを重ねておわび致します

3月26日 — 3月29日

那智勝浦町から潮岬を訪れ白浜町に至るまでの4日間は天候にも恵まれ、その夕夜は寒かったが、うららかな春の海岸沿いのR42を軽快に走る。この中で今も印象に残っているのは日置川町の浜辺で大成功「和菜いため」を食べながら観望に腰かけて眺めた海に沈む夕日である。

3月29日 — 4月1日

足慣らしも終っていよいよ内陸部へのチャレンジである。天候は4月1日の川津ユースから高野山までのどしゃ雨を除いてほぼ良好であった。やはり私は山の方が好きである。海はどうも日本中どこでも同じように見えて変化がない。それに比して山はすべてが新鮮だ。道端にころかっている石ころひとつでもまた草の一本にも暖かい趣が感じとられ、それにもまして木々の空隙からのぞく空の形は他では絶対に見るここのできないものである。

4月2日 — 4月6日

合宿も峠を越し、あとは奈良まで街中を走っていかねばならない。途中吉野で連泊し、様にはちょっと「やいよう」だったが枝見酒を楽しんだ。

（	12日間の全走行距離	420 km
	全費用	27000円以下